

歌舞伎役者の乗込

藤岡真衣

歌舞伎役者が、一座を組んで興行地に入ることを「乗込」と呼び、興行の初日を前に、一般の人びとや後援者へ挨拶をして公演の宣伝をする。現在でも、芝居に出演する役者たちが船を使って劇場へ向かう「船乗込」や、人力車に乗って挨拶をする「町廻り」（お練り）など、各地でさまざまな形で行なわれている。今年（2012年）、大阪の道頓堀川で夏の風物誌となっている船乗込と、香川県琴平町の四国こんびら歌舞伎大芝居の町廻りを見る機会があった。その様子を紹介するとともに、江戸時代の様子もたどってみたい。

江戸時代以降、道頓堀は、歌舞伎や人形浄瑠璃を上演する芝居小屋が建ち並んでいたが、現在は、松竹座だけになっている。毎年松竹座で行なわれる「関西・歌舞伎を愛する会」の「七月大歌舞伎」の際には、船乗込をする。

船は、出演する歌舞伎役者や関係者を乗せて、大川（旧淀川）に架かる天満橋の西側にある八軒家浜船着場を出発する。東横堀川を南下し、西に曲がって道頓堀川に入り、戎橋へと向かう（図1）。賑やかな囃子の音とともに、浴衣姿の役者が乗った船が近づくと、橋や川岸に集まった人びとから役者の屋号が呼び掛けられる。戎橋のたもとに着くと、船上で興行の演目と役者の紹介がある。橋の南詰で船を下りた役者たちは、松竹座まで練り歩く。紅白の幕が張られた劇場前で、役者や関係者が挨拶と手締めをして興行の成功を祈願する。



図1 道頓堀の船乗込

江戸時代の歌舞伎役者は、毎年劇場との間で10月に1年間の出演契約を結ぶことになっていた。その最初の11月の公演は、契約を結んだ役者たちを披露することから顔見世興行と呼ばれた。今でも京都の南座の11月末から12月末までの公演を、顔見世と呼ぶのはその名残である。船乗込は、顔見世興行を前にした大坂独特の催しであった。

大坂の芝居を解説した『戯場楽屋図会』（上巻・1800年刊）の乗込の項には、毎年10月末に、京や江戸から来坂して新しく一座に加わった役者たちが、東横堀の九之助橋から船で道頓堀の芝居小屋へ向かったことが記されている（図2）。船から上がって芝居小屋に入った役者たちを、前年度から引き続き舞台を勤める古参の役者が出迎えたのち、座本（興行の主催者）と盃事を行なった。

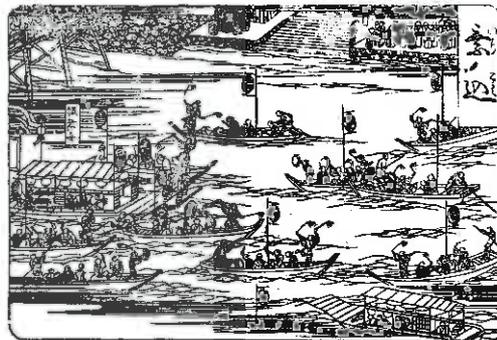


図2 『戯場楽屋図会』（上巻）の乗込の図

船乗込には、役者を迎える船も多く参加した。安永3年（1774）、初代尾上菊五郎が来坂し、10月26日に船乗込を行なった。その時の様子を記した『梅幸集』（1784年刊）の付録「尾上菊五郎一代狂言記」によると、太鼓持や若手の船が、役者たちの船を出迎え、「此後大坂乗込の迎ひ船は凡此幕幟なども用ひて是を賑ひの例の始ともなりし程の事ぞかし」とある。また、嘉永7年（1854）、8代目市川団十郎が来坂し、7月28日に行なった乗込でも、料理屋・茶屋、轟眞筋ひいさすじなどの大御座船・屋形・茶船、見物船が多数ならば、その光景はさながら天神祭のようであったという（『近来年代記』第5冊、1851～64年）。

このように、船乗込は顔見世以外の機会にも行なわれていた。これらの文献のほかにも、文久2年(1862)10月に、江戸から帰坂した2代目片岡我童一行の船乗込の様子を描いた「川竹乗込賑」(芳雪画)が残っている。そこには、袴姿の役者が乗った船とともに、迎え船や、役者を見ようとする人で賑わう川岸の様子が描かれている。

明治以降も、初代市川左団次や5代目尾上菊五郎などの船乗込が道頓堀で催された。大正13年(1924)10月31日には、初代中村吉右衛門の一行が、7艘の三十石船で中座まで船乗込を行なった。黒紋付姿の役者たちは、緋毛氈が敷かれた舳先(きさき)に座して、両岸の轟(とどろ)筋へ挨拶をした(『大阪朝日新聞』1924年、10月31日付、夕刊)。この年を最後に道頓堀川での船乗込は途絶えたが、昭和54年(1979)に「関西で歌舞伎を育てる会」(「関西・歌舞伎を愛する会」の前身)の第1回歌舞伎公演を記念して、55年ぶりに復活し、現在も続いている。

つぎに、香川県琴平町の四国こんぴら歌舞伎大芝居の際に行なわれる町廻りについてみてみたい。歌舞伎が上演される「旧金毘羅大芝居」は、天保6年(1835)に道頓堀の芝居小屋を参考にして建てられたという。建物は昭和45年(1970)に国の重要文化財に指定され、昭和51年(1976)に修復工事が完了し、昭和60年(1985)から毎年歌舞伎が上演されている(図3)。公演の前日には、役者が人力車に乗って町内をまわる「成功祈願町廻り」(お練り)が催される。

出演する役者たちは、公演の2、3日前に琴平に入って打ち合わせや稽古をする。町廻りの当日は、地元の金刀比羅宮を参拝して、興行の成功祈願祭を行なう。役者が町に戻ると、いよいよ町廻りが始まる。地元の小学生が公演の口上を述べ、金刀比羅宮の金棒引や芸妓衆のだんじり囃子などに続いて、役者を乗せた人力車が、町内をまわる。幟(しほ)がはためく沿道では、役者を一目見ようと集まった人びとが歓声を上げる。

江戸時代、3・6・10月の金毘羅大権現(現・金刀比



図3 旧金毘羅大芝居

羅宮)の祭りには市がたち、歌舞伎などが上演された。役者の一行は船で讃岐に着くと、陸路、金毘羅の門前町をめざす。町はずれで芝居の関係者に迎えられた一行は、町廻りをして芝居小屋に入った(『金毘羅大芝居のすべて—草薙金四郎選集15—』、1985年)。

このような乗込は、江戸時代に安芸の宮島でも行なわれた。巖島神社の旧暦6月17日の祭りには市が立ち、歌舞伎や操り芝居が上演された。『楽屋図会拾遺』(上之巻・1802年刊)の「芸州宮嶋乗込之図」には、大坂から役者たちが宮島へ向かう様子が記されている(図4)。それによると、役者は、6月中旬に大坂を出船して船中で芝居の稽古をし、途中、小浦というところで身支度をして再び船に乗り込む。船上では、役者や囃子方たちが座る前で、子役が三番叟を舞う。そして、幟を立てた50艘もの獵船(漁船)が、役者が乗る船を宮島まで曳いた。役者は船から上がると、銀主(興行の出資者)の家に挨拶をし、さっそくその夜に芝居を上演したという。

乗込の時は、歌舞伎役者を間近で見ることができるまたとない機会であったことは、今も昔も変わらない。

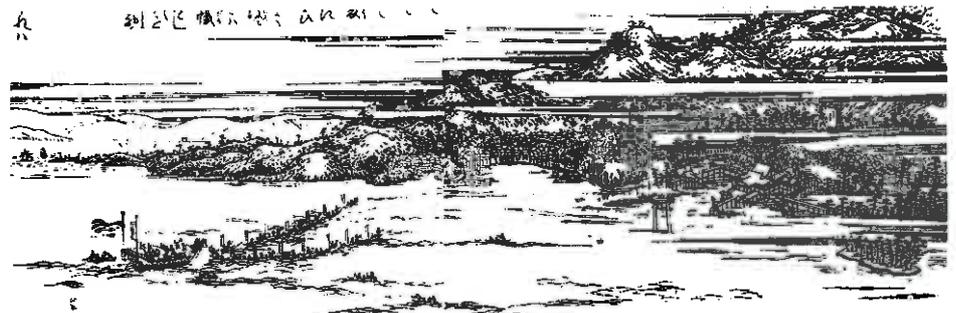


図4 『楽屋図会拾遺』(上之巻)の「芸州宮嶋乗込之図」